

4 ハマフエフキにみられた寄生虫 によると思われる疾病について

照屋忠敬、多和田真周

病害発生状況

当支場の屋外60トン水槽で飼育中のハマフエフキ親魚が、昭和52年3月下旬ごろから摂餌量が減り、4月上旬には全滅に致った。

へい死したハマフエフキ10尾中9尾は眼球の白濁、突出がみられ、開腹の結果、寄生虫のシストと思われる付着物がみられた。

同様なことが、昭和53年3月にも屋外200トン水槽で親魚養成飼育中のハマフエフキ11尾中11尾にもみられた。

また、昭和52年5月に室内池で飼育中のハマフエフキ、アミフエフキにも20尾中20尾、同様な症状がみられた。

症 状

群の観察：摂餌しなくなり、動きがにおく、池のスミに集まるようになる。魚体は体表のスレ症状により白っぽくみえる。

外部所見：眼球の突出、白濁、出血等がみられ、体表や鰭にスレ症状がみられる。〔写真(1)、(2)〕

内部所見：腹腔内壁、腸、肝臓、生殖巣、鰾等、内臓諸器官にシストの付着がみられる。また、肝臓、鰾の褪色のみられるものもある。〔写真(3)、(4)〕

検 査 結 果

写真(3)、(4)にみられるように、シストの色は灰色から黒かっ色まであり、大きさは径2mm~10mm以上のものまである。

シストを割り、スライドガラスに塗抹してメチレンブルーで染色し400倍で検鏡すると、大きさが7.5 μ ×3.2 μ (長さ×幅)でナスビ形をしたものが観察される。〔写真(5)〕

それが何であるかは、同定を依頼中であり、詳しい事については良く解っていない。

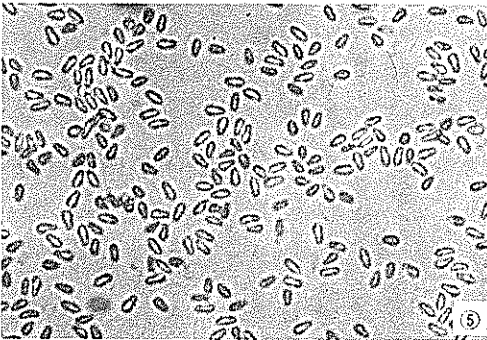
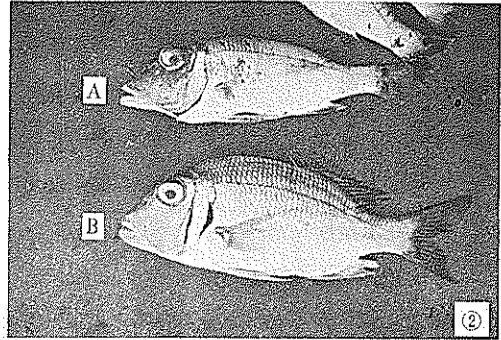
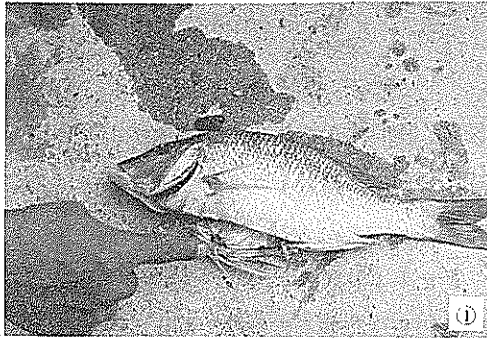
昭和52年7月29日、川平湾でつり上げられたハマフエフキ1尾にシスト付着がみられたが、聞きこみによると、天然でのシスト付着はあまりみられないとのことである。

ハマフエフキと他にアイゴ、カスミアジ、ボラ、ゴマフエダイなどを混養していたが、ハマフエフキ以外の発病はみられなかった。ハマフエフキの他、ハナフエフキ、アミフエフキにもシスト付着がみられ、フエフキダイ科は寄生を受けやすいように思われる。

シスト付着のみられたハマフエフキの肝臓より、3%加ニュートリメント・ブロース寒天培地で細菌分離を試みたが、細菌は分離されなかった。

ハマフエフキにみられた寄生虫によると思われる疾病についての図版

水産学雑誌



- (1) ハマフエフキ
- (2) A アミフエフキ
B ハナフエフキ
- (3) 肝臓、腸にシストの付着がみられる
- (4) 腹腔内壁、鰓にシストの付着がみられる
- (5) シスト内容物を400倍で検鏡

今後の問題点

シストの付着がみられるのが天然にもいるので、シスト付着そのものが、ハマフエフキ親魚の直接のへい死原因かどうか、まだ問題を残す。天然におけるハマフエフキのシスト付着率と感染試験を行う必要がある。

参 考 文 献

- 益田一、荒賀忠一、吉野哲夫（1975）魚類図鑑 南日本の沿岸魚 東海大学出版会
佐野徳夫（1975）サケ・マス類—グルギア症、魚病診断指針（サケ、マス、アユ、タイ）
P-50 水産庁
高橋 繁（1975）アユ—グルギア症 同上 P-110 同上
中島健次、江草周三（1976）現場技術者のための寄生虫簡易鑑別法 同上（追補編）
P-55 同上

システロウチノミ 11
サケノミ 12
アユノミ 13
マスノミ 14
アユノミ 15
アユノミ 16
アユノミ 17
アユノミ 18
アユノミ 19
アユノミ 20